

経営のヒントとなる言葉
渋沢栄一
「順逆は人自ら造る境遇なり」

Index

渋沢栄一（実業家）

渋沢栄一（実業家）

「順逆は人自ら造る境遇なり」（*）

出所：「渋沢百訓 論語・人生・経営」（角川学芸出版）

冒頭の言葉は、

「『順境』『逆境』という境遇は、自身の心掛けと努力によって作られる」ということを表しています。

1867年、渋沢氏はパリ万国博覧会使節団の随員として欧州を視察し、西洋文化に触れて大きな感銘を受けました。帰国後は明治新政府に入り、大蔵省（現財務省）勤務を経て実業界へ転じ、数々の企業の創設を手がけ、生涯を通じて実に約500社もの企業の育成に関わったといわれています。

こうした足跡から、渋沢氏は運に恵まれ、常に順境にあったと思われがちです。しかし、渋沢氏自身は、「順境や逆境というものは与えられるものではない。順境や逆境は、基本的には人間が自ら作り出すものである」ととらえていました。すなわち、順境にあるように見える人は、常に前向きな志を持ち、絶えず真面目な努力を重ね、その結果として自分自身で順境をつかみとっているのです。逆に、もし日ごろから不平不満が多く、真面目な努力を怠っているならば、その人は自ら逆境に陥ってしまうことでしょう。このように、渋沢氏は「順境と逆境は、その人の心掛けと努力の結果によって作られる」と考えていたのです。

ただし、現実には「人の力が及ばない逆境」も存在します。渋沢氏はこの逆境を、先に述べた人為的な逆境に対して「自然的逆境」と名付けました。そして、ほかならぬ渋沢氏自身も、この自然的な逆境を経験した一人なのです。

農家に生まれた渋沢氏は、幕末に攘夷（外国人や外国文化を排斥すること）思想の影響を受けて江戸で一橋家に仕え、ついには幕臣にまで立身しました。しかし、その後、明治維新によって江戸幕府は消滅し、旧幕府側の多くの人々が不遇な生活を余儀なくされることとなりました。

このように、環境があまりに目まぐるしく変化する中では、いくら個人が努力しても、その変化に抗うことはできません。このため、渋沢氏は「こうした状況の中で焦っても仕方がない」と覚悟を決め、悲観的になることなく黙々と努力を続けました。そして、やがて大きな時代の変動が静まると、このときの努力が実を結び、渋沢氏はようやく逆境から脱して順境に転じることができたのです。

渋沢氏は、逆境への対処について次のように述べています。

「己より生じて、遂に逆境に立たねばならぬ運命を、余儀なくされたという場合なら、まず自分についてその悪い点を直す、また天命と自覚したら、その事を処して完全の道理を尽くすというよりほか、逆境に対する道はあるまいと思う」（*）

サンプルレポート

本レポートは、サクセスネットで公開している
ビジネスレポートの一部を公開したサンプルです。
サクセスネットサイトにログインした後、全文を
閲覧することができます。